

『大唐西域記』解説

前川 捷三

<資料> 書名は「だいとうせいいいきき」または「だいとうさいいきき」と読む。十二巻、六冊。第一冊は序と巻一が二十七丁、巻二が二十五丁。第二冊は巻三が二十二丁、第四が二十丁。第三冊は巻五が十九丁、巻六が二十三丁。第四冊は巻七が十九丁、巻八が三十丁。第五冊は巻九が二十六丁、巻十が二十四丁。第六冊は巻十一が二十五丁、巻十二が三十二丁。表紙左上方の題簽に『西域記 一二』のように書名と巻数を墨書する。柱刻も『西域記 一』のように記す。綾装、袋綴じ。古活字本である。本の大きさは縦約27糎、横約18.5糎。

<著者> 燕国公の序がある。次いで「大唐西域記巻第一」とし「三藏法師玄奘奉詔譯 大摠持寺沙門辯機撰」と二行に記す。この部分の文字や記し方が巻によって相違している。玄奘は四部叢刊所収本では玄奘とする。辯機は巻五、六、七、九、十二では辨機となっているが、四部叢刊所収本では全巻に辯機とする。普通には、玄奘、辯機の文字で表す。また、ここに「訳、撰」の語を用いるが、玄奘が資料を提供または口述するなどし、それを辯機が編集したことを言うと考えられている。

唐代、太宗の貞観三年（西暦629年）玄奘は仏教経典を求めて長安を出発し、インドに向かった。インドに渡った後、帰国するのは貞観十九年（645）のことであった。この旅行の間に体験した西域やインドの諸国の言語、風俗、地理、伝説などを記したのがこの書物で、多方面にわたり当時の様相を伝えてくれる貴重な資料である。また、日本における訓点本は国語学の有益な研究資料となっている。

<解説> 菅文庫所蔵本を知るのに平凡社中国古典文学大系『大唐西域記』（昭和四七年再版）に水谷真成氏が執筆された解説が参考になるので、そのまま引用させていただく（四二四ページ）。

「日本刊本には次の如きものがある。

古活字本 無辺無界、一行二十字、半葉十行、無刊記、六冊本
何れ慶長・元和の間の刊行であろうと思われる稀覯の書。第二、第八両巻首にある刻蔵題記から、本書の底本は北宋・徽宗の崇寧二年（1103）刻の福州閩県易俗里の白馬山東禅等覚院（等覚禅院とも略称する）版であることを知る（原本は毎行十七字の折本）。千字文による分類は転・疑の両部にわたる。活字を組む時の過失からか、割注の文字が上下・左右に組み誤まれている部分がある。」

菅文庫本にも組み誤まった割注がある。巻一、五丁オの蘇迷盧山の割注は二行にわたる故か、「唐高言妙曰須弥又山舊弥婁皆訛曰」となっていて意味を成さない。四部叢刊所収本は「唐言妙高山舊曰須弥又曰須弥婁皆訛略」とあり、これなら通ずる。また、巻二、二十

五丁ウの「齧斷」に「上助反齧 - 」とあるのは齧字の音義を注している。音を反切法で表すのだから助一字しか無いのは正しくない。四部叢刊所収本は「上助陌反齧 - 也」としていて、これなら反切法の表し方になる。その他の点でも水谷氏の記述と合致する（同ページに掲載する巻二巻首の写真も参照）。本書は水谷氏の言う稀覯の刊本である。なお、訓点、国名の振り仮名、誤字を正す（巻五、十七丁オや巻六、十九丁ウなど）等、墨書の加筆がある。

（本学教育学部教授）

Last Updated: 2001/5/14